

アーカイブ 通信 No.35

No.35

2025.11.1

◆編集・発行：

ネットワーク・市民アーカイブ

事務局

〒189-0012 東京都東村山市萩山町 2-6-10-1F

tel・fax：042-396-2430

E-mail：info@archive-tama.sakura.ne.jp

◆正会員 1 口 6,000 円、賛助会員 1 口 3,000 円 / 年

ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226

口座名：市民アーカイブ ※団体会員 2 口～

戦前の軍事史研究は、天皇の軍隊である「皇軍」の正統性を歴史的に検証する性格が強く、批判的な考察は基本

戦前の軍事史研究

不幸にも戦争や軍勢力が身近になり、「新しい戦前」といった言葉が聞こえてくる今、資料館として過去の経験・記録をいかに平和への道に活かせるのか、考える機会にしたいとの思いから、企画・開催しました。

市民アーカイブ多摩開館11周年記念講演会（6月8日）は、東京大空襲・戦災資料センター館長の吉田裕さんをお迎えしました。同センターは、民立民営の施設として、散逸しかねない戦時資料や空襲にまつわる人々の記憶を集め、記録しつつ、さまざまな方法で次世代に戦争体験をつなぐ実践を展開しています。また吉田さんは、アジア・太平洋戦争の歴史を探究する研究者として、特に兵士への視点から戦争の現実について多くの著作を発表してきました。

公文書の焼却と隠匿
敗戦直後、連合国による戦争責任や戦争犯罪の追及を恐れた陸海軍上層部の指令により、公文書の徹底的な焼却が行われた。焼却を免れた文書は「おそらくは0・1%にも満たなかった」と指摘されている。各市町村でも、兵事書類の焼却命令が出され、まった量の兵事書類が残され

公文書の焼却と隠匿

的に避けられる傾向があった。また、陸海軍の軍事組織によって研究が独占され、一般の歴史研究者が研究に関わることはほとんどなかった。1889年には将校の自主的な研究団体「月曜会」が解散させられ、軍事研究の自由が失われた。1945年8月の敗戦により、この「皇軍史」は崩壊したものの、新たな研究がすぐに進展したわけではなかった。

個々の軍人の履歴書である兵籍簿も、敗戦直後の焼却や部隊の全滅、空襲などによって失われたものが少なくない。厚生省の調査によれば、昭和戦前・戦中期の軍隊経験者約970万人のうち、約240万人分の兵籍などの基

た自治体は、判明しているかぎりですべて22自治体にすぎない。この焼却により、地方の兵事史料の多くが失われ、自治体史編纂の際に大きな障害となっている。さらに、戦争責任、特に昭和天皇の戦争責任の追及を免れるために、大本営政府連絡会議や御前会議、「大陸命」「大海令」（天皇が発する統帥命令）といった重要文書が隠匿された。これらの史料が公刊されるようになったのは、60年代後半から90年代にかけてのことである。

礎データが行方不明となっている。兵籍簿は、旧軍人の履歴証明（特に軍人恩給の申請時などに不可欠な書類だが、その不備は部隊史や戦争体験記の執筆にも支障をきたしている。近年、履歴証明に関する子や孫の世代からの照会が増えているようだ。しかし、政府に統一した方針がないため、陸軍の資料を所管する都道府県と、海軍の資料を所管する厚生労働省で交付申請ができる遺族の範囲に違いがあり、親族の戦争体験を知る機会に格差が生じている。また、戦没者一人ひとりの個人データは国や都道府県が保有しているものの、集計・統計化する努力が怠られているため、アジア・太平洋戦争の年次別、年齢別、階級別の戦没者数といった基礎的データが不明のままである。なお、靖国神社にはアジア・太平洋戦争の戦

市民アーカイブ多摩 開館11周年記念講演会 報告

アーカイブズと戦争

記録と資料が語る平和への道

お話：吉田 裕さん

（東京大空襲・戦災資料センター館長、歴史学者）



シリーズ“現場”を訪ねる⑫

中帰連平和記念館を訪ねる —市民が継承する加害と赦しの記憶—

- ・2025年12月6日(土)
13:30～16:00頃
- ・集合：
① 13:00 東武東上線鶴ヶ島駅
西口(タクシーに分乗10分)
② 13:20 現地記念館前
- ・訪問先：中帰連平和記念館
(川越市笠幡1948-6)
- ・案内人：芹沢昇雄さん他
(中帰連平和記念館事務局長)
- ・参加費：500円
(集合①は別途タクシー分乗代)
- ・定員：20人(申込み先着順)
- 【申込み】ネットワーク・市民アーカイブ事務局(8頁参照)

没者213万人が合祀されている。合祀が可能になったのは、国が戦没者の個人データを靖国神社に提供したからであり、50年代後半に合祀者が急増する。その後政府もデータの提供が憲法に違反することを認めるようになったが、靖国神社は創立130周年記念事業の一環として、『祭神名票』の電子データ化に着手し、99年12月に「電子化作業を完了」している。

伝統的な歴史学の限界と新しい研究潮流の台頭

公文書の焼却・隠匿に加え、戦後の軍事史研究の停滞には伝統的な歴史学の体質も影響していた。戦後、大学に復学した学徒出陣の学生や戦後に大学に入學した旧軍の若い正規将校たちが近代史研究を担うようになったが、彼らの前に立ちはだかったのが「50年原則」である。この原則は、「50年以内の出来事は、当事者が生存しており利害関係があるため、客観的な評価が難しく、歴史研究の対象にならない」という考え方だった。これでは、敗戦直後の時点で考えると、日清戦争以前の戦争しか研究の対象にならなくなる。

こうした状況の中で、軍事史研究を実際に担ったのは、防衛庁・自衛隊を中心とする旧軍関係者だった。彼らの研究の集大成が、防衛庁防衛研究所戦史室（現・防衛研究所戦史研究センター）が編纂した『戦史叢書』全102巻である。この叢書は、一般の研究者が見ることができない膨大な一次史料を駆使した共同研究であり、軍事史研究に大きく貢献することになった。しかし、編纂官のほとんどが旧陸海軍の出身者であり、特に陸軍中心の研究集団であったことから、作戦本位の分析に偏り、



兵站や情報などの問題が軽視されている、陸海軍の行動を擁護する傾向が強い、「現場」の視点が欠如している、といった問題点も指摘されている。なお旧海軍軍人は、旧陸軍主導で創設された戦史室に対してきわめて警戒的であり、戦史室に対抗して民間の研究団体である史料調査会を別に創設している。この史料調査会が所蔵していた資史料は、その後、厚生労働省所管の博物館である昭和館に寄託・寄贈されたため、昭和館は旧海軍関係の貴重な資史料を多数所蔵する博物館となっている。

一方、焼却を免れた陸海軍文書は、進駐した米軍に押収され、アメリカへ移送された。これらの文書は58年に日本へ返還されたが、その受け入れ先が旧陸海軍の関係者が中心の防衛研究所戦史室であったため、一般への公開は大幅に遅れた。旧軍人たちが公開に消極的だったからである。本格的な閲覧体制が整い、一般の研究者が閲覧できるようにになったのは79年以降だが、その時点でも多数の非公開史料が存在した。史料の公開が急速に進んだのは、2001年の情報公開法施行以降である。

こうした状況の中で、戦後歴史学の中からも軍事史研究への取り組みがようやく始まっ

市民アーカイブ多摩の四季②

初冬 サザンカ

夏の暑さのせいか、サザンカも年々弱っており、花が咲き始めると、ホツとして歌い始めます♪

ツバキ属 *Camellia* (カメリア) は常緑樹で、中国とその周辺地域に120種ほどがあり、中国に約100種があります。日本はツバキ属の北限にあたり、主にヤブツバキ（一般にツバキと呼ばれる）とサザンカという2種が野生しています。この2種は園芸品種の基礎として非常に優秀なもので、その子孫は「カメリア」と呼ばれて世界に広まっています。ツバキ類の中国名は山茶、あるいは山茶花で、サザンカという和名は中国名を日本的にサンサカ



と読んだことに由来すると言われています。冬を過ぎて咲き始め、花卉の基部が互にくっついており、子房（雄しべの基部）に毛が無いツバキに対して、サザンカは冬前から咲き、花卉がばらばらで、子房が毛に覆われています。メジロやヒヨドリが蜜を吸いにやってきますね。

（畠田仁 元東大小石川植物園園長）

た。1990年代に入ると、民衆史・社会史・地域史の視点から戦争や軍隊を捉え直すところから研究が急速に進展したのである。狭義の軍事史から広義の軍事史への転換である。この転換を担った世代は、防衛研究所戦史部が所蔵する陸海軍文書の本格的な分析に取り組んだ最初の世代でもあった。しかし、戦史研究の分野は依然として旧軍関係者や防衛省・自衛隊関係者の専有物であり、戦場の生々しい現実を社会史・民衆史・地域史

現代社会の変化と戦争の記憶の継承

現代の日本社会は、戦争体験世代の急速な減少という大きな変化の中にあり、これが戦争の記憶の継承に深刻な影響を及ぼしている。戦争の悲惨さを知る世代が減少し、被害者としての実感を基盤とした平和主義的意識も後退している。その影響

は、平和資料館や平和博物館の入館者減少という形で現れており、多くの施設が運営上の課題を抱えている。また、戦争体験者の死去に伴い、個人の貴重な戦争体験記や日記などの史料が散逸・処分される事態が各地で起こっている。戦争関連史料を収集・整理・公開する公的な機関がほとんど存在しないという現実がその背景にある。

一方、戦争遺跡を観光資源として活用する動きも活発になっている。しかし、その結果、展示内容が地域の戦争の記憶から乖離したり、歴史の負の側面が軽視されたりする問題も指摘されている。福岡県筑前町の大刀洗平和記念館では、展示のリニューアルに際し、地域と直接関係のない「特攻」や「ゼロ戦」が展示の柱に据えられ、地域住民の記憶に深く刻まれている空襲の展示は後景に退いた。兵庫県加西市の「さかさい」では、飛行場建設に動員された朝鮮人労働者の問題に全く触れられていない。これらの事例は、戦争遺跡が、無残な死を遂げた人々を悼む姿勢や、負の歴史に向き合う姿勢が失われた時、単なる観光や「ミリタリー関連趣味」の対象として消費される現状を示している。

わたしが館長を務める東京大空襲・戦災資料センターも、

設立当初は空襲被害の解明と体験の記録化に力が注がれ、戦争責任や加害の問題は先送りされた。しかし、2000年代後半からは加害の問題、そして被害と加害の重層的な関係を意識するようになった。07年には「無差別爆撃の源流」を検証するシンポジウムを開催し、20年のリニュアルでは、東京大空襲をゲルニカに始まる戦略爆撃の歴史の中に位置づける姿勢をより明確にした。また、開館当初は展示がなかった在日朝鮮人の空襲被害についても、批判を受けて07年の増築リニュアルで展示が設けられ、20年にはさらに展示が整備された。

戦争の歴史を検証するためには、歴史史料を国民の公的な共有財産として認識し、収集・整理・管理・公開することが不可欠である。しかし、政府だけでなく国民の間にもその認識は乏しく、歴史研究者による史料公開要求も立ち遅れていたのではないかと、という問いが投げかけられている。(記・吉田裕)

【質疑応答】

参加者…軍事史研究に進んだきっかけは何か。また、大学の卒論のテーマは何か。

吉田…私は1954年生まれだが、両親や学校の先生が戦争体

験者で、戦争が遠い昔のことと思えなかった。そして子どもの頃大ブームになった少年向け週刊漫画に連載されていたのが戦記物で、ジュニア版の太平洋戦史が刊行されていたこともあり、軍事史への関心を深めた。旧軍人の「戦史研究」に対しては反感があったが、大学に入りエンゲルスの論文などに触れることで、軍隊を社会との関係で考えるようになったことが大きいと思う。

大学の卒論は、明治期の日本軍による下士官養成を取り上げた。自由民権運動に走ったりしていた下士官が、軍人勅諭の発布などで、体制に組み込まれる状況を描いた。

参加者…吉田さんは資料にあたる際、どのような視野をもって向き合っているのか？

吉田…私には、研究者も「時代の子」だという想いがある。少し前の世代だと、中国の文化大革命が大きな影響を及ぼしているように思われる。ただ、私自身はそういう風潮に対して違和感があり、歴史上の反満抗日運動もクルールに見ているところがあった。

中公新書の『日本軍兵士』は、元幹部自衛官と陸軍将校の会である陸修偕行社の機関誌『偕行』で、「自分たちにとっ



て、知らないことが書かれていた」ということで、割合ほめてもらえた。たとえば、復員兵への「心身両面のケア」といったことは、今の自衛隊では想定されていない。それから、兵士の虫歯の問題については、亡くなられた早乙女勝元氏が、「一番面白い問題だ」と言っていた。

私は、軍事史研究では、議論の共通の土台を作る必要があると思う。それは、「資料に基づいて議論をする」ということだ。

参加者…アーカイブ自体、陸軍と海軍で資料の残り方に違いはあるのか。たとえば被害の調査では、自衛隊によって資料が独占されたことと関係があるのか。

吉田…それは資料公開の遅れによるところが大きいと思う。

資料の塊を目の前にして注意すべきことは、どういう歴史意識に影響を与えているかで

ある。そのためには、何が公開され、何が非公開かに注意する必要がある。たとえば、戦争犯罪に関する史料の公開は大幅に遅れた。その結果、加害の問題が抜け落ちることになる。

また資料には、使われ方の問題もある。知覧特攻平和会館などの特攻隊員の遺書を例にとると、それを読んで自分に喝を入れるということが行われているが、そのような「遺書の絶対化」には違和感がある。旧海軍関係の資料館で目にする多くの遺書については、それらが集められた目的を考えると、目的を達成できずに帰ってきた人間を、封ずる役割があったと考えるべきだろう。

参加者…数年前、叔父の軍歴照明を入手したことがあったが、記されていた書類が赤茶けていた。こういった資料の保管状況はどうなっているのか。

吉田…各都道府県では、軍人恩給を發給することとの関連で、関係書類が保管されている。それらは集計され、公表されなければならないと思う。

ただし、『続・日本軍兵士』にも記したが、『陸軍主計団記事』は明治から敗戦までの一連のものが、関係者の団体から自衛隊に寄贈されていた。とこ

ろが、私が閲覧を要求したら「搜索しましたが、見つかりませんでした」という答えが返ってきた。おそらく捨てたのだ

ろう。このように、戦後残された資料であっても、場合によっては廃棄されている可能性が高い。

【参考文献】
吉田裕「敗戦前後における公文書の焼却と隠匿」(吉田「現代歴史学と戦争責任」青木書店、1997年)
同「日本人の戦争観」(山岩波現代文

庫、2005年)
同「軍事関係史料の戦後史」(同「現代歴史学と軍事史研究」(校倉書房、2012年)
同「兵士たちの戦後史」(山岩波現代文

庫、2020年)
同「戦後歴史学と軍事史研究」(同編「戦争と軍隊の政治社会史」大月書店、2021年)

私と市民活動資料 22

市民のアーカイブ 出会いと活動へ

菅原敏夫(公益社団法人東京自治研究センター理事)



私の自立したアーカイブと最初の出会いは、偶然が折り重なっている。四十数年前のことだ。

都心の喧騒は一步離れると奇妙な静寂をもたらす場所がある。新宿に向かう大動脈、新宿通りを西へ、皇居の半蔵門から500メートルくらいだろ

うか。麹町に差ししかかったら一本左に折れると高い建物がなくなる。しばらく南に下ってから今度はちよつとまた西へ。2階建てのしもた屋が現れる。奇妙な静寂。ここは平河天満宮の境内で、静寂が設計されている。

センターは、全国センターの事務所であると同時に、いろいろな団体の共同事務所、シェアオフィスともなっていた。その2階に、「住民図書館」があった。1980年頃の話である。

私はというと、やっと拾われて、自治体の研究をする研究所に職を得た。ある県庁にアルバイトで潜り込んで、自治体の財政を調べ、論文を書くという仕事を与えられ、顔だけは地方財政学者になった。独学でこれを職業にしなければならぬ。

当時は「革新自治体」の転換期、退潮期でもあった。美濃部亮吉氏が都知事を退任したのが79年である。政府や自民党は「TOKYO」作戦と銘打って革新自治体の奪還を大つばらに訴えた。「TOKYO」というのは、東京、大阪、京都、横浜、沖縄の頭文字をとったもので、本当にそうだった。そして同時に革新自

治体が自治体の政権を担っている間に、住民運動との軋轢も頻発するようになっていた。横浜に住んでいた私はとりわけ横浜新貨物線反対同盟の機関紙、ミニコミでの発信に関心を持っていた。住民図書館のメンバーも論陣を張っている。私は迷わず住民図書館に向かった。

住民図書館の「畳の間」

ところが、真面目な話はここ

まで。私は上に述べた全国センターの2階建てのしもた屋に向かう。2階の真ん中に事務所間の畳敷きの共有スペースがあつて、まちまちの休憩時間にメンバーが出てきてお茶を飲んで雑談する。住民図書館の主、丸山尚さんも休憩時間に出てきて、畳にあぐら座になつて、茶飲み話、世間話をする。気軽に、手軽に、さて住民運動とは……などと話題にできず、世間

話に終始した。でもジャーナリストとして、編集者としてアーカイブへの向き合い方はたくさん話題にしてくれた。アーカイブは運動の結晶なのだ、運動と誠実に向き合わなければ利用方法を誤る。運動は政治だ、政治信条、党派性、情況と誠実にれば利用方法を誤る、と。

インターネットとNPOの先駆け
あぐら座の雑談ではもう1つサジェスチョンがあった。住民図書館でボランティア活動している青年が「インターネット市民運動」という言葉を使っていた。80年代半ば頃の話である。インターネットなどまだどこにもない時代。彼はその後アメリカに留学した。興味を持って私も訪米して調べ始め、成果が2つあった。1つは「モザイク(Mosaic)」。役所に行つても、市民団体に聞いてもこの話題で持ちきり。ウェブ・ブラウザのことなのだが、インターネットが爆発間近だった

時代のことである。もう1つが、アメリカでは市民団体が法人格を取り、米国内国歳入庁の501(C)(3)の資格を得て、寄付金控除を受ける制度があること。帰ってきてNPO法の草案作成に没頭した。

住民図書館は2001年に解散した。しかしアーカイブは散逸することなく、埼玉大学、後に立教大学も加わって維持される。現在は池袋の立教大学共生社会研究センターで十全に公開されている。一利用者としてもありがたい限りだ。それ以上の要求はバチが当たるというものだ。ただ1つだけ。市民のアーカイブには「畳の間」が要る。私はそこであまりにも多くのことを学んだのだ。

「革新自治体」の転換・退潮期と住民運動

だが、詩的な印象はここで終わる。2階屋に近づくと、下の階は印刷屋。昔の必要以上に音を出す輪転機が動いている。この建物「市民運動全国

※1 米国国立スーパーコンピュータ応用研究所(NCSA)が1993年に公開した初期のウェブ・ブラウザ。

※2 アメリカ合衆国内国歳入法第501条C項は、連邦所得税が免除される非営利団体の規定を29種類定めており、その(3)が非営利市民組織にあたる。

(すがわら・としお「会員」)

ミニコミ紹介

市民アーカイブ多摩が所蔵する、団体や個人が発行する会報・通信(ミニコミ)を、発行者の方に紹介していただきます。

八王子に生きる女たち

八王子女性史サークルは2004年、八王子市男女共同参画センター主催の講座としてスタートしました。07年、自主サークルとなり、八王子の女性

たち56名の聞き書きを中心に講座記録3冊と『八王子に生きる女たち1〜6』の6冊を刊行しました。そして15年、それらの

聞き書きを再構成し、合わせて八王子の女性史の概説、織物用語集、八王子女性史年表なども付記して『聞き書きで綴る 八王子の女性史』を刊行。第18回「日本自費出版文化賞(地域文化部門)」で入賞することもできました。さらに、23年には論文集

『昭和期 八王子の保育の歴史と女性たち』も刊行しました。

これまで語られてきた歴史は男



- ・2008年創刊、年刊、200～300部、A4判、86～186頁
- ・E-mail:akutsu@kc4.so-net.ne.jp
- ・当館所蔵：1～6(全巻)
- ▷6号(2017.9)＝『聞き書きで綴る 八王子の女性史』後の記録

エデュカシオンエ

リベルテ

5・15、2・26、9・11と聞けば多くの方はその意味が分かるでしょうが、「10・23通達」と聞いてピンと来る方は少ないでしょう。これは東京都教育委員会が2003年10月23日に出した「入学式・卒業式等における国旗掲揚及び国歌斉唱の実施について」という通達の通称です。その内容は、卒業式などでの日の丸の掲揚と君が代斉唱の際の教職員の起立を強制するだけでなく、個々人の座席の配置まであらかじめ決めるなど式のあり方をがんじが

掲載された冊子や本の聞き書きのページを表示する「キーワード索引」を作りました。さらに、関連する女性史研究の先達たちの講座やメンバーの研究レポートのページも表示、「話者別キーワード一覧」も作りました。

八王子女性史サークルは、今年度で20年余りの活動を終了します。そしてこの度、刊行物11冊と最後の刊行物となった『刊行物のキーワード索引』を市民アーカイブ多摩に受け入れていただき大変嬉しく思います。会としての活動は終了しますが、私たちがまとめた記録が有効活用されることを心から願っています。(坪文子)

らめにするものです。

この命令に反したとして、484名の教職員が処分されており、関連して多くの訴訟が提起されました。通達自体が違憲・違法であるとした「予防訴訟」

(通達による被害を予防防ごうという意味がこめられている)や処分撤回を求める東京「君が代」裁判など関連裁判は2桁になっています。多くの裁判は最高裁まで闘い、終結しましたが、数次に及ぶ処分撤回の闘いは現在第五次訴訟が進行中で舞台を高裁に移しています。

「東京・教育の自由裁判をすすめる会」は、これらの裁判を支援しようと多くの市民に呼びかけ、05年7月に発足しました。裁判原告団への財政援助・裁判の傍聴などの呼びかけ・パンフレットの発行・国連の人権委員会への訴えなどの活動をしています。

『リベルテ』発行は活動の中心で、05年10月に第1号を発行して

以来、今年の7月で79号を数えるにいたりました。内容は裁判の状況、教育問題に関わる各種集会の紹介、子どもたち(定時制の大人も含む)との交流・実践の報告など多岐にわたります。

「10・23通達」は直接的には教職員を対象とするものですが、真のねらいは子どもたちにもあります。03年以降、都立学校のあり様は大きく変わり、自由が失われている。東京だけでなく全国への影響も大きく、大学ですら自由な教育・研究を奪われようとしています。通達との闘いは日本の教育全体の自由を勝ち取るための結節点となっています。一人ひとりの人権が守られ、子どもたちがのびのびと成長できる学校にしたい、心をしばられることなく誰もが自由に考え、表現できる社会にしたいということが私たちの願いです。

ぜひとも私たちの会へのご入会をお待ちしています。(原田収)



- ・2005年創刊、年4回、700部、A4判、10～12頁、年会費：2000円(個人)・5000円(団体)
- ・E-mail: kyouseihantai@gmail.com/ 新宿区神楽河岸1-1東京ボランティア・市民活動センター box No.41
- ・当館所蔵：26号(2012年)～
- ▷79号(2025年8月)＝東京「君が代」裁判・五次訴訟判決一部勝訴、総会報告、ILO/ユネスコから3度の勧告他

第2回 6月28日

重度しようがいしゃが地域で あたりまえに生きるために

藤吉さおりさん(自立ステーションつばさ代表)
藤木晴美さん(同スタッフ)



◆施設を出て自立生活へ (藤吉さおりさん)

脳性マヒと診断されたのは1歳3か月の時、出産時のトラブルが原因だった。就学時検診で養護学校への通学を勧められ、自宅から平塚の養護学校まで、毎日片道1時間半かけて通学した。母が病気になる、叔父夫婦に預けられたが、叔父夫婦の介護も難しくなり、中学3年生の時に自身の知らないところで施設入所が決められた。4歳下の妹は

本人の希望で青森の叔母の家に引き取られることになった。施設に入所したのは中学3年の夏休み。施設での生活は、最初の1週間は楽しかったが、排泄のことで職員に大声で怒鳴られ、殴られた。初めての経験で、それ以来、健常者が怖くなった。施設では食事、排泄、入浴など、生活の時間がすべて決まっていた。思い出すのも嫌な経験しか残っていない。

高校卒業まで養護学校で過ごし、卒業後1年間、自分の家

に戻ることを目標に、厚木の大きなセンターでリハビリを続け、父と妹と3人で暮らすことになった。ところが父が勝手に決めてきた作業所(＝授産施設)に行くことになり、そこは全然楽しくなかった。作業所が夏休みの時に、国立市の「かたつむり」で自立生活をしていた友人の家に遊びに行った。自分もいつか自立生活をしたと話したら、友人から「するなら今だ」と言われた。

家にはそのまま帰らず、かたつむりの代表の三井絹子さんに



◆藤吉さんの介護に関わって (藤木晴美さん)

子どもの頃、しようがいのある人を身近で見かけることも関わることもなかった。それが社会の仕組みによるものだということを知った。大学進学を機に親元から離れ、学生時代にボランティアとして木村英子さんと出会った。未経験な中、一つひとつ介護を教わり、介護者としての関わり方を教えてもらった。

◆質疑応答

2人のお話の後、多くの質問が寄せられた。自立生活、すなわちなぜ脱施設なのか、という質問に対し、藤吉さんからは訴えても後回しにされたり無視され、時間通りにできなければ怒鳴られたり暴力をふるわれた経験が語られた。自立生活はままならないことがあるが、それ以上自分の意志で生活できることの充実感が語られた。



第3回 7月26日

「コミュニティの中からコミュニティへ」 —新宿二丁目 akta のエイズ対策—



岩橋恒太(特定非営利活動法人 akta 理事長)

◆HIVの正しい知識を広める

私は、2006年からHIV領域での活動と研究に携わってきました。aktaは、アジア最大級のゲイタウンである新宿二丁目を拠点に「コミュニティの中からコミュニティに向けて」というスローガンのもと活動する

コミュニティベイスの組織(CBO)です。未だ

日本では、新規HIV感染者が年間に1000人、その約30%がエイズ発症で発見されるという課題があり、新規感染の多くが同性間の性的接触によるものです。しかし、これは特定の集団だけの問題ではなく、社会的な「脆弱性(vulnerability)」が感染

は、新規HIV感染者が年間に1000人、その約30%がエイズ発症で発見されるという課題があり、新規感染の多くが同性間の性的接触によるものです。しかし、これは特定の集団だけの問題ではなく、社会的な「脆弱性(vulnerability)」が感染

拡大に影響しているという、より社会学や社会疫学的な理解が必要です。エイズは「不治の病」「死の病」という誤解が根強く残っていますが、医療の進歩は劇的です。適切な治療を受けければ、HIV陽性者の平均寿命は一般人とほぼ変わらず、仕事や学業を続けることも可能になりました。さらに、体内のウイルス量が検出限界未満(Undetectable)に抑えられていれば、性行為でもパートナーに感染させることはありません(Untransmittable)。このことを

藤吉さんの介護を始めた頃、2人は十分な意思疎通ができていないと木村さんに指摘され、藤吉さんが自分を「市役所の職員のように」と思っていたことが分かった。自分から相手の気持ちを理解しようとする姿勢ができていなかった。人として傍らにいての大切さを知った。15年前、重度しようがいしゃとして自立生活をしていた夫と結婚した。認知症のために施設入所をしていた義母を引き取

介護者養成プログラム(「介護される体験」、多摩市の「障がい者自立生活サポーター支援制度」、重度訪問介護制度、厚生労働省告示523号(就労・修学・政治活動等の外出に訪問介護の利用制限)の課題などについて意見交換が行われた。しようがいがあっても認知症になっても、意思が尊重され、生活することが人権だということがわかるお話だった。(記・大出春江＝運営委員)

「U・U」といいます。

また、PrEP（曝露前予防服薬）も、24年に日本でも薬事承認され、新たな予防選択肢として注目されています。過去の誤解を解消し、コミュニティを超えて社会に正しい知識を広めることが、差別や偏見のない社会を築く第一歩となります。

◆信頼と連携に基づく情報発信

1980年代のエイズパニックの時代、恐怖を煽る情報が蔓延し、HIV陽性者や少数者への差別を助長しました。こうした中で、コミュニティの健康課

題がコミュニティ不在のまま施策が決定されることへの反発から、アメリカのゲイコミュニティは自らの手で「セーフアセックス」という概念を生み出しました。これは、コンドームの使用や予防の工夫によって、HIV感染に関わらずセックスを楽しむ方法を見出すという、性の健康を人権の一部と捉え、性的喜びやセックスポジティブなメッセージを大切にする画期的な考え方でした。感染症の流行下でのこの発明は、今でも変わらず重要なものであると考え

ています。

また、この流れをくみ、「信頼関係と連携に基づくコミュニケーション・アウトリーチ活動」を活動の柱としています。

2003年9月に開設されたコミュニティセンタースタイルは、厚生労働省の委託事業として、



これまで14万人以上の方々に利用され、誰もが安心して情報を得て交流できる場を提供しています。また、新宿二丁目のバーやクラブを巡り、コンドームや性の健康に関する情報を提供する「デリバリーボーイズ」など、対面でのアウトリーチ活動を重視しています。HIV陽性者の手記朗読とカラオケを組み合わせた「Living Together」な

ど、HIV陽性者のエンパワメントと社会全体でのステイグマ解消を目指したユニークなイベントも多数企画しています。講演を通じて、HIVの最新情報にアップデートすることの重要性をお伝えできたことを願っています。もしPrEPの活動にご興味をお持ちいただけましたら、ぜひ一度新宿二丁目に見学にいらしたり、ボランティアとしてご参加いただければ幸いです。（記：岩橋恒太）

※ Human Immunodeficiency Virus（ヒト免疫不全ウイルス）

記憶と記録の場をめぐる旅⑮

戦争と平和の資料館

ピースあいち

名古屋駅から地下鉄東山線で20分、一社駅から住宅街の中を北方向にゆるい坂道を10分ほど登り、少し下り始めると、白い3階建ての建物が現れる。壁面には、空か海のような



青い世界に浮かんでいる人々に、下にいる人が両手を伸ばしながら、見つめ合っている。生死を越えて近づこうとしているのか——入館前に想像をめぐらせられる。資料館建設運動は1993年に始まっている。アジアで2千万人、日本で310万人の命が犠牲になった戦争体験は風化するばかり。二度と戦争を起すことはならない、戦争の記憶をとどめるために資料館が必要と「戦争メモリアルセンターの建設を呼びかける会」が結成された。愛知県と名古屋市に資料館の建設を要望。議会に請願もし採択され、建設に向けて基本構想まで策定されたが、建設には動き出さなかった。

会が通信発行や展示会などを重ねて活動が続ける中、2005年に戦争体験者である女性から土地90坪と建築費1億円の寄付申込みがあった。県・市にも伝えたが動きださなかったため、2年の歳月を経て07年に市民の手で開館。現在も受付、企画展示、講座企画、運営全般が会員やボランティアによって運営されている。

1階の壁面には年表と移動可能なパネル展示があり、集会時は広いスペースになるよう工夫されている。奥には本棚や事務室などがある。2階は常設展で、「愛知県下の空襲」「15年戦争の全体像」「戦時下のくらし」「現代の戦争と平和」の4つの柱で構成され、被害や過去だけに止まらない多様な視点で展示され、映像・図書コーナーもある。3階は訪問時は企画展「沖縄から平和を考える」辺野古の海は今」が開催されていた。年間4〜6回の企画展が行われ、隣の部屋では次の企画展の準備で大賑わい。当初の計画では3階は賃貸スペースとして運営費を賄えるよう設計したが、多くの人が集うようになり、企画展示や会議をする場所になったとのことだった。年



戦争と平和の資料館 ピースあいち

- ・所在地：名古屋市中東区よもぎ台 2-820
- ・電話：052-602-4222
- ・アクセス：地下鉄東山線一社駅歩 12分
- ・開館：火曜～土曜 11：00～16：00
- ・入館料：大人 300円、小中高生 100円
- ・運営：認定特定非営利活動法人 平和のための戦争メモリアルセンター

間約1千万円以上かかる運営費は会費や寄付で賄っている。展示や催しを開催して伝えるだけでなく、同じ思いを持つ人がつながり、日々の暮らしの中で具体的に動ける場としてもピースあいちの存在意義を感じた。（江頭晃子＝運営委員）

◇保存スペース募集中

前号でお知らせしましたが、緑地保全を主目的とするNPO法人グリーンサンクチュアリ悠（GS悠）は、岸中書庫を含む一部の建物を取り壊して緑地に戻していくことになりました。そのため、現在岸中書庫に保存中の資料（段ボール約100箱）と書架を保存するためのスペースを探しています。東京・多摩地域内で10～13㎡（4畳前後）の保存場所を提供くださる方、お心当たりのある方は、ご連絡をお願いいたします。

◇秋の樹林開放日

当館を含む緑地の保全をしているGS悠の樹林開放日が開催されます。紅葉を楽しみながら、若者サークル「ぼれつと」による演奏、フリママーケット、カフェもあり。
12月7日（日）10～12時（市民アーカイブ多摩地図参照）

◇NPO法人化の書類申請

24年度総会でNPO法人化が決まり、今年6月の総会で定款等の提出書類が承認されました。7月に東京都の事前相

運営委員会など

談に行き、いくつか訂正点の指摘を受け、再度運営委員会で検討し、9月に改めて申請書類を提出。その後、さらに電話での指摘が2回あり、再訂正し提出、10月8日に受理完了という連絡がありました。今年度中には法人化予定です。

6月8日 年次総会・NPO法人設立総会（参加者21人）、記念講演会参加者86人
6月21日 第3回運営委員会、参加者7人。会員・カンパ者、当番予定、来館者・各部会から報告（以下毎回）。総会・記念講演会感想・反省、通信検討、緑陰トーク役割分担、25年度体制、GS悠話し合い経過報告、NPO法人設立手続他。
6月28日 第2回緑陰トーク（話し手：藤吉さおり・藤木晴美さん）。参加者25人。
7月18日 第4回運営委員会、参加者7人。25年度体制。GS悠からの提案検討、法人設立相談結果報告・改定案検討、緑陰トーク反省と今後の分担他。
7月26日 第3回緑陰トーク開催（話し手：岩橋恒太さん）。参加者16人。
8月23日 第5回運営委員会、参加者7人。緑陰トーク反省と今後。現場を訪ねる企画、GS悠から返答報告、来館者数カウント方法、平川千宏さん追悼他。
9月19日 第6回運営委員会、参加者6人。現場を訪ねる、緑陰トーク分担、募金運動、法人設立事務、下水方法説明他。
9月28日 第4回緑陰トーク開催（話し手：家人祐輔さん）。参加者16人。

会員数（2025年9月）

169（正会員67人
賛助会員96人・6団体）
◆新規入会ありがとうございます
（賛助会員）林 泰子さん

カンパありがとうございます
（2025年6～9月）

大出春江さん 横田順子さん

来館者・参加者の声

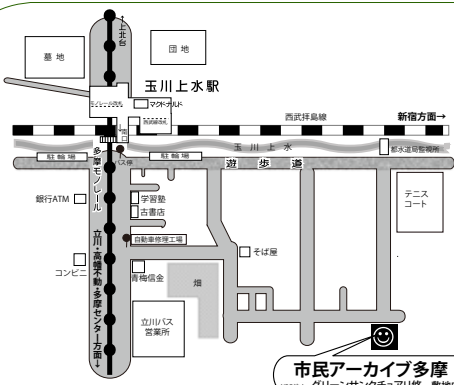
・家庭的で居心地よい自然に囲まれた場所ですね。
・レポートを置いていただきありがとうございました。
・あれ程さがされたHIVが話題にのぼらなくなり、どうなったのかと思っていましたが、今もあること、そして行動的に働く人々がいて、努力してつちかっていたことに敬服します。

訃報 平川千宏さん

25年7月14日、逝去されました。享年91歳。元国立国会図書館職員、元住民図書館運営委員、市民・住民運動資料研究会主宰。都立多摩社会教育会館資料廃棄反対運動、当会発足準備会から参画。07年から14年まで運営委員を務め、法政大学環境アーカイブズへの資料移管等を牽引。著書に『市民活動資料の保存と公開―草の根の資料を活用するため―』に『市民活動資料の保存・整理・公開に関する全国調査報告』他。

編集後記

平川さんからの連絡は、いつも丁寧な手書きの手紙。直接会う前は女性だと思いついていた。ライブリアンでアーキビスト。緻密で丁寧な仕事に多くを学びました。感謝。（大・吉・増・江）



【市民アーカイブ多摩利用案内】

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日（年末年始・8月中旬休館有）
- ・開館時間：午後1時～4時 ・入館カンパ：100円～
- ・所在地：〒190-0002 東京都立川市幸町5-9-6-7
（多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南口徒歩10分）
- ・tel・fax：042-536-5535（電話は開館中のみ）
- ・見られる資料：市民団体や個人が発行するミニコミ（通信や会報等）
- ◆会員・カンパ募集中 ～市民の活動を過去・現在・未来につないでください～
- ・正会員1口6,000円/年 ・賛助会員1口3,000円/年 ※団体会員2口～
- ゆうちょ銀行 振替口座00120-9-729226 口座名：市民アーカイブ
- ※他銀行から ○一九（ゼロイチキョウ）店（019）当座 0729226